

# 豊沢川流域の地誌学的性格

—— 湯口村の地誌 ——

横 田 幸 八

Studies on a Regional Characteristics  
of the Area through the River Toyosawa.  
(A Regional Geography of Yuguchi Village).

Kohachi YOKOTA

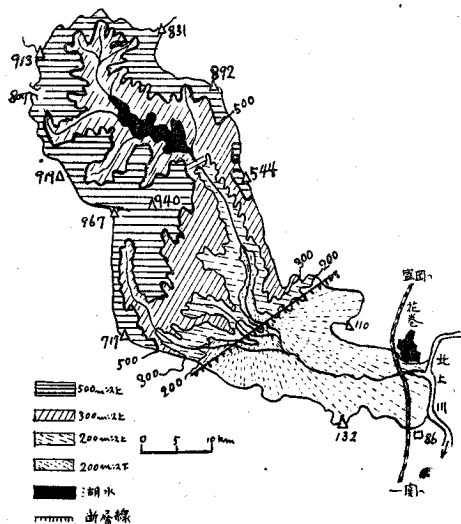
## 1. 緒 言

岩手県の中央部を南流し、動脈的役割を果しているのが北上川である。北上川に沿う花巻街の南限をなして東流し、北上川に注ぐ河川が豊沢川である。この河川は僅か36kmの長さを有する小河川ではあるが、その流域を対象として地誌学的に之を把握し、その性格を摘出せんとするものである。この流域面積の75%を占めているのが湯口村であるから、湯口村の地誌といつても過言ではない。

## 2. 位置と境域と広さ

豊沢川の流域は和賀郡沢内村、横川目村、笹間村、飯豊村、岩手郡御所村、稗貫郡石鳥谷町、湯本村、花巻町、東部は北上川を隔てて矢沢村につつまれる地域で、稗貫郡の南部を画する。この河川に注ぐ主なる支流は、寒沢川、三ッ沢川、白沢、出羽沢、桂沢、マコトロ沢、鶯沢等である。本流の中股川は上流に於いて、東より大楯川、西より西股川を併せて南東に流れること20余軒、そして山麓より離れるや東流して北上川に注ぐ。その流域面積は185.53km<sup>2</sup>ある。

第1圖 豊沢川流域地形圖



## 3. 起伏と標高による地的性格

豊沢川の水源は、稗貫・和賀・岩手三郡の境界地域で、その最高地は中山峠(807米)の北方912.9米の地点である。その尾根続きが東に走つて、青ノ木森(831.2米)高理山(830米)塚瀬森(892.3米)更に南東走して、大森山(543.6米)江釣子森山(375米)根岸森(264.3米)まで続き鍋割川との分水界をなし、草井山断層崖に至つている。この地域が流域の北限である。北に走るものは、山伏峠を越えて、駒ヶ岳火山縦列に連なる。南に走るものは、中山峠(807米)を越え、小倉山(850米)毒ヶ森(919.2米)駒頭山(940米)更に南東走して八方山(716.6米)長根崎山(265.6米)まで続き、草井山(413.2米)断層崖の南端に至る。この支脈は尻平川との分水界をなし、同時に和賀郡との境界であつて、豊沢川流域の南限である。これ等境界

地域は稗貫・和賀の火山岩噴出地域で、山容はいづれもドーム型をなしている。五間ヶ森・天ヶ森・茅森山・大森山等、森の名前を多くつけられてあるのもその為である。

この地域は、南北に走る草井山断層崖を境として(第1図 地形図参照)山地部と沖積扇部の二つに区分することが出来る。沖積扇部は断層崖下の標高138米を頂点とし、北上河岸の84米を扇端の高底点としている。この間隔が10軒あるから1軒の間に5.4米の高度差をもつ緩傾斜地である。この沖積扇地域の南限は、飯森山(131.6米)を最高点として東西に走る洪積原野地域であつて、飯豊川との分水界をなし、和賀郡との境界地である。北部は138米の山居部落を西端とし、花巻台地上の森地(115米)・半道・四本杉(96.6米)を結び、花巻町の川口町を東端とする地域を境界としている。即ちこの地域は南・北・両台地によつて抱かされている沖積扇である。この面積は64方軒あつて、豊沢川流域面積の3分の1を占める。この地域を豊沢川下流地域とよぶことにする。その他の3分の2は豊沢川山地部である。豊沢川山地部は、駒頭山と、塚瀬森との支脈が相接する地域を境として、その上流と下流では著しい地形差を示している。この地点より下流蟹沢・柴林までの約9軒の間は深い峡谷をなし、狭い河岸段丘が点綴し、或は、谷底に洪源地をもち、そして箭入蛇行しつつ東流する変化性に富む地域である。この地点よりの上流は、直ちに塚瀬山麓より南流する。鶯沢と、駒頭山より北流する白沢とを併せる地域が最も狭く深い溪谷である、この地域より上流は高原の桃源境で眼界が広く展開する地域である。従つて、この白鶯地域(白沢と鶯沢の合流点の少々下流で最も狭く深い点をかく呼ぶことにする)を境として下流を豊沢川中流地域とよび、白鶯地域の上流を豊沢川上流地域とよぶことにする。しかるとき中流地域の面積は63方軒で、上流地域の面積は58方軒となる。したがつて豊沢川流域は起伏的性格から、沖積扇の下流地域、箭入峡谷の中流地域、高原河谷盆地の上流地域の三つに区分することができる。

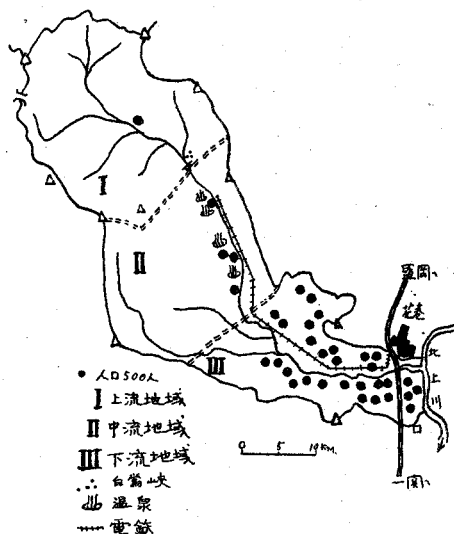
次に高距性より数量的に之を算出して見ると第1表のようになる。

第1表 高距性より見たる地積

区分 標高	下流地域	中流地域	上流地域	計
200m以下	97%	3%	0%	100
200m以上	3	20	3	26
300m以上	7	46	36	82
500m以上	7	23	33	56
700m以上	0	8	28	36
計	100	100	100	300

即ち下流地域は200米以下が97%を占める平坦地であるが、中流地域は300米以上70米以下が70%を占めているので起伏性の複雑さを示している。上流地域は500米以上、900米以下が61%を占めているので高原性を如実に示してあることが窺われる。

第2図 豊沢川流域人口分布図



#### 4. 人口分布による地的性格

豊沢川流域を生活舞台としている人口総数は18,880人(昭和28年7月末現在)で、総世帯数は3,158である。人口密度は一方軒100人である。この人口の分布状態は、第2図にその実数は第2表にそれぞれ示す通りである。

第2表 人口数及密度

地域区分	面積 km <sup>2</sup>	人口 人	密度 人	世帯数
上流地域	58	353	6	54
豊澤		553		54
中流地域	63	2,066	28	378
鉛		542		118
下シ澤		290		50
大澤		591		105
志戸平		323		54
久保山口		320		51
下流地域	64	16,461	255	2,726
神明		1,035		150
鍋倉		1,056		159
膝立		687		103
圓万寺		560		95
上根子		1,690		287
中根子		687		109
下根子 向小路 西十二丁目		7,196		1,302
中村				
太田		3,550		521

第3表 土地分類百分比

土地区分	田地	畑地	山林	原野	其の他	計
地域区分	%	%	%	%	%	%
上流地域	0.1	0.4	57.0	3.4	0.3	61.2
中流地域	0.4	0.6	17.0	2.1	1.2	21.3
下流地域	9.5	3.0	1.0	0.5	3.5	17.5
計	10.0	4.0	75.0	5.0	5.0	100.0

即ち、標高200米以下の地域に総人口数の87%が居住し、残りの13%が豊沢山地になる。しかしそのうち11%が中流地域の山地に、2%が上流高原地域に居住する。最も居住地として恵まれない笹入峡谷地域に多くの居住者を見るのは山地依存の形態でなく、特殊景の然らしむるものである。それは温泉の湧出による為の定住者を見るからである。換言すれば温泉峡谷であるからである。これを人口密度より考察すれば、第2表に示すように、6人、28人、255人という著しい差異を示している。ここに於いて人口分布上よりも、上流地域、中流地域、下流地域に、この地の性格差を把握することが出来る。

### 5. 土地利用による地的性格

起伏構造と人口構造よりの形式的観点に相對して土地利用という内容的観点より検討して地的性格を抽出することは当然の労作である。第3表は土地分類百分比表である。

下流地域は、水田卓越地域であつて穀倉地域である。これに畑地が加わるので耕地14%のうち13%がこの地域にあるということが、この地域の地的性格である。しかしこの地域内に於いても鍋倉地域と上根子地域と西十二丁目地域では、その経営形態が、必ずしも等しいということの出来ない性格を持つていることは当然である。

中流地域の土地利用に於いては、特に卓越するものを抽出することは出来ない。若し強いてあげるならば、林野面積の19%に対する利用である。関上場、清水野、久保、山口等

寒沢川と三沢川の流域や、大沢川、松倉山、江釣子森山の山麓及び青山、洗沢、松原、山居等に利用可能地を求めることが出来る。現在入植している、大久保、五間ヶ森の開拓は、この地域の林野性に対する利用の先達性である。然し、この地域の性格は潜在資源の開発にある。現在開発されている硫黄、それに関連する鉱石等が埋蔵してある。これ等の未知数は暫くおくとして、現在利用しつつあるものは温泉の湧出である。この湧泉に立地せる西鉛、鉛、大沢、志戸平の四つの温泉地は第4図(郡内浴客)、第5図(県内浴客)、第6図(県外浴客)の示す如く多くの浴客を誘致している。ここにこの地域の性格がある。

上流地域の高原性は、林産物を主体とし薪炭に依存する生活を本体としていることは、日本に於ける山地居住者の共通労作である。豊沢郷の54戸は大部分薪炭の生産によつて計画生活をたててい

るのである。この桃源境は、国有林につつまれた山間低地であつて、山祇神社と清浄な湧泉を中心に部落が形成されてある平和郷である。

第4表 A 各温泉場に入浴せる五ヶ年間の平均数  
(自昭和24年  
至昭和28年)

温泉名 町村名	鉛温泉	大温 澤泉	志温 戸平泉	計
1 花巻	1,091	1,888	798	3,777
2 大迫	5	28	49	82
3 石鳥谷	36	81	20	137
4 内川目	2	5	5	12
5 外川目	2	4	2	8
6 龜ヶ森	4	11	2	17
7 新堀	8	28	6	42
8 八重畑	11	49	8	68
8 矢澤	51	199	7	257
10 八幡	14	104	64	182
11 湯本	25	97	16	138
12 宮野目	26	186	29	231
13 湯口	124	436	109	679
14 太田	51	266	113	430
計	1,450	3,382	1,228	6,060

第4表 B 各温泉場に入浴せる五ヶ年間の平均数  
(自昭和24年  
至昭和28年)

温泉名 郡市名	鉛温泉	大温 澤泉	志温 戸平泉	計
1 盛岡	315	907	321	1,543
2 釜石	97	134	51	282
3 宮古	42	90	27	159
4 一関	58	279	37	374
5 大船渡	11	0	4	15
6 岩手	95	114	50	259
7 紫波	207	411	90	708
8 稗貫	1,450	3,382	1,228	6,060
6 和賀	522	1,500	405	2,427
10 膽澤	458	1,545	292	2,295
11 江刺	145	606	142	893
12 西磐井	45	182	11	238
13 東磐井	173	232	49	454
14 氣仙	113	97	18	228
15 上閉伊	241	128	93	462
16 下閉伊	69	86	28	183
17 九戸	22	36	8	66
18 二戸	21	45	8	74
計	4,084	9,774	2,862	16,720

第4表 C 各温泉場に入浴せる五ヶ年間の平均数  
(自昭和24年  
至昭和28年)

温泉名 都道府縣名	鉛温泉	大温 澤泉	志温 戸平泉	計
1 北海道	16	49	9	74
2 福島	13	36	13	62
3 宮城	267	243	121	631
4 山形	6	24	9	39
5 秋田	96	94	24	214
6 青森	160	180	41	381
7 東京都	102	157	72	331
8 神奈川	8	13	5	26
9 千葉	4	13	2	19
10 埼玉	4	9	3	16
11 群馬	4	3	2	9
12 栃木	4	5	3	12
13 茨城	7	9	4	20
14 静岡県	6	3	2	11
15 山梨	1	2	1	4
16 愛知	6	7	4	17
17 岐阜	2	2	2	6
18 長野	2	4	2	8
19 新潟	3	2	3	8
20 富山	4	1		5
21 石川	1	1		2
22 福井	1	1		2
23 京都	6	3	2	11
24 大阪	1	5	4	10
25 滋賀	1	1		2
26 奈良	2	1		3
27 三重	1			1
28 和歌山	1	1		2
29 兵庫	1	3	2	6
30 岡山	1	1	1	3
31 広島			2	2
32 山口			1	1
33 徳島	1			1
34 愛媛			1	1
35 高知		1		1
36 福岡	1	4		5
37 大分			1	1
38 佐賀	1			1
39 鹿兒島	1			1
計	735	878	336	1,949

6. 温泉郷湯口

岩手県の温泉郷を、温泉郷湯本、温泉郷湯口、温泉郷湯田、温泉郷御所、山地温泉郷の五つにまとめることが出来る。このいずれの温泉も地的性格を明瞭に具現している。5つのうち3つが湯名をもっている——湯本村、湯口村、湯田村にぞくし、何れも個性がある。温泉郷湯口の北部に接続するのが温泉郷湯本である、だから湯本村の温泉郷は、湯口村の温泉郷と姉妹の関係におかれてある。この2つの温泉郷は東北本線花巻駅より私鉄電車によつて1は北東に1は南西に走つて連絡をつけている。湯本温泉郷は資本家の計画によつて台温泉より曳湯して近代色濃厚な人為的温泉であるが、源泉の台温泉はこれと相反する自然色豊かな湯治場である。これに相対してあるのが湯口の温泉郷であり、豊沢川の温泉郷でもある。この2つの温泉郷を対比すると自然性の豊かさ変化性の多様性に於いては温泉郷湯口は、遙かに、温泉郷湯本を凌駕している。然し人為的施設に於いては

第5表 A 花巻電鐵鉛線主要驛乗車人員調

自昭和24年 } 5ヶ年間平均  
至昭和28年 }

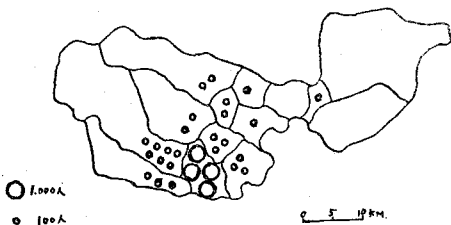
驛名 月	西公園	熊野	一本杉	二ツ堰	志戸平	大沢	鉛	西鉛
1	7,000	2,300	3,650	3,620	4,300	6,120	5,056	568
2	7,310	2,140	3,710	3,700	3,370	5,410	4,820	503
3	6,900	2,270	3,550	3,650	3,640	5,520	4,530	660
4	7,190	2,370	3,640	3,860	2,180	3,740	3,230	445
5	7,210	2,300	3,720	3,520	3,551	4,600	3,580	719
6	7,026	2,300	3,583	3,540	3,672	5,353	4,021	812
7	7,330	2,378	4,451	3,610	2,716	4,185	3,221	813
8	10,170	3,120	5,188	4,863	5,475	6,550	5,363	937
9	9,575	2,932	4,539	4,571	4,449	4,823	3,779	877
10	6,900	2,314	3,426	3,233	3,075	4,632	3,380	847
11	6,800	2,420	4,000	3,500	2,810	4,014	3,008	814
12	8,600	3,094	4,844	4,477	2,712	3,081	2,652	664
計	92,011	29,938	48,301	46,144	41,950	58,028	45,640	8,663
順位	1	7	2	5	6	3	4	8
	216,394				155,281			

第5表 B 花巻西鉛間定期運行バス乗車人員調

(昭和27年4月創業)  
(昭和27.28年の平均数)

主要驛 月	西公園	熊野	一本杉	二ツ堰	志戸平	大沢	鉛	計
1	472	148	199	109				928
2								
3			運	休				
4	267	42	101	150	57	100	250	967
5	628	71	184	285	235	242	573	2,218
6	469	69	145	253	202	306	228	1,672
7	239	24	82	103	69	114	227	860
8	1,222	96	465	299	186	288	488	2,974
9	1,334	300	563	381	149	237	322	3,286
10	570	117	280	322	283	345	463	2,380
11	771	165	368	385	387	371	163	2,610
12	836	222	370	429	322	310	463	2,962
計	6,808	1,354	2,757	2,716	1,890	2,313	3,177	20,857
順位	1	7	3	4	6	5	2	
	13,635				7,380			

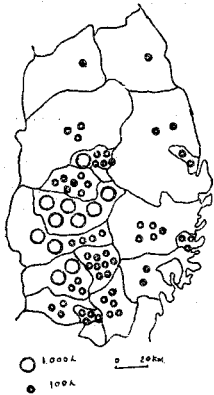
第3圖 種貫郡下よりの毎月平均浴客数分布圖 (昭和24~28年5ヶ年間平均)



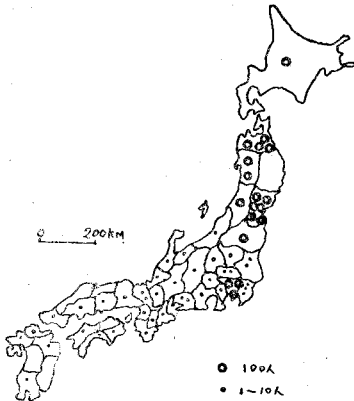
遜色がある。そこで人為的施設は後天性のもので容易に改廢出来るが、自然的条件は短時間に於いて人間の意志をもつては如何ともなし得ないのである。したがつて温泉郷湯口は洗練されては居ないが姉たる資質を充分に有している。豊沢笹入峡谷には4つの温泉湧出地がある。そこに立地したのが、西鉛、鉛、大沢、志戸平の温泉場である。この温泉場の性格は地方的な浴客を主体とし、湯治場として利用されてあることは第

3 図から第7 図までの図表と第4 表によつて明確である。然し来訪者が県内から県外へと漸増の傾向にあることも統計の示す通りである。即ちこの地域に杖を曳く者は5 ヶ年間平均して毎月平均(旅館台帳による平均24,919人, 電鉄及びバスに乗車せるものの平均162,661人)人であることは温泉旅館に記載されてある台帳よりの集計であるが, 一方花巻電鉄の乗者数よりもその交通量を見出すことが出来る(第5 表)。

第4 圖 岩手県内よりの毎月平均浴客数分布圖 (昭和24~28年5 ヶ年間平均)



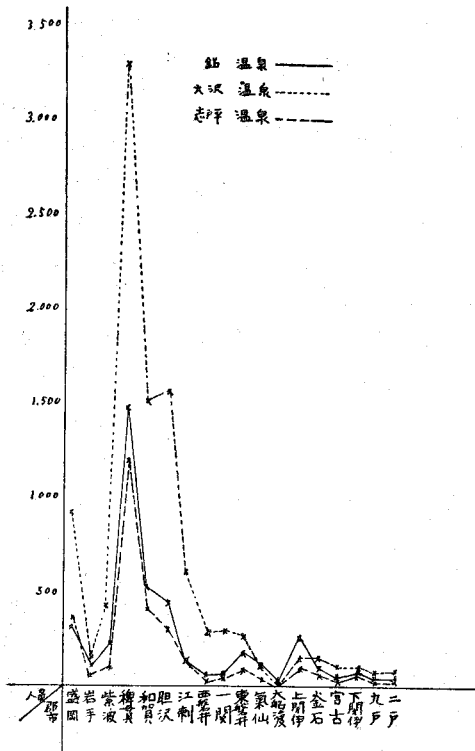
第5 圖 岩手県外よりの毎月平均浴客数分布圖 (昭和24~28年5 ヶ年間平均)



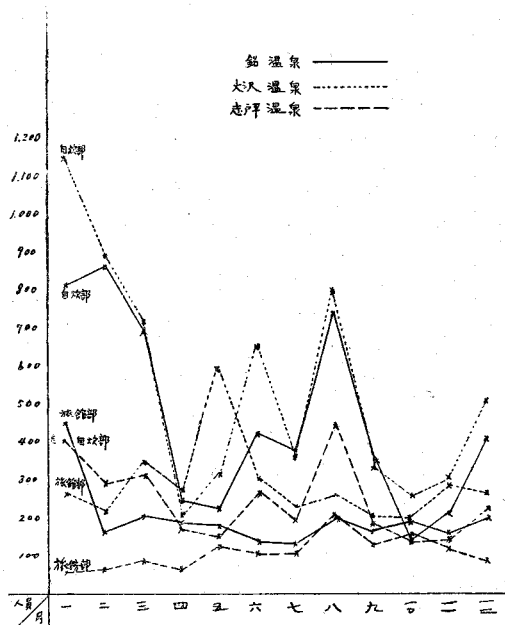
ここに於いて温泉郷湯口を訪れる人員は湯口村にとつては第1の資源と見ることが出来る, 第2の資源は自然に準備されている温泉の湧出それ自体である。そこで, この2つの資源を如何に活用し, 如何に効果を發揮せしむるかということとは湯口村民の関心事でなければならない。且つ, 湯口村振興の課題でもある。第1に対しては交通網の完備である。現在

道路の幅員を拡張中であるが, これを舗装化し, 出来得る限り直線化することである。第2に運輸機関の改装と運行時間の短縮をはかり, 電車路線の直線化と古典的な客車を改装して乗客本位に

第6 圖 3 温泉場に於ける毎月平均入浴者比較圖 (昭和24~28年5 ヶ年間平均)



第7 圖 3 温泉場に於ける自炊部・旅館部入浴者月別平均比較圖 (昭和24~28年5 ヶ年間平均)



心理的傾向を尊重して改変することである。換言するならば、定期バスの利用者と、電車利用者の本質を考えそれぞれに個性を持たせることに留意すべきである。両者とも回数の増加と時間の短縮をはかることは当然である。現在18軒間を片道に75分を要することは文化生活者にとっては好感を持ってないところである。第2に対しては充分に個性を發揮させべきである。即ち西鉛温泉は現在の官庁寮を清純にして最も健康的にそして文化生活者の理想郷を顕現し、鉛温泉は自炊生活に重点を置き、家庭を対象とし、子供の世界を具現し且之に対しての娯楽設備を充実して長期滞在を愛好するよう施設し、大沢温泉は旅館経営を本体とし、接客の方法として先進地に遜色なきまでに至誠をもつて慰安と休養につとめ来訪者の満足するよう時代感覚を洞察して施設と経営を先行させ、志戸平温泉は若人の集会に、保健体育の向上に主眼を置き之に対応する施設を構ることが肝要である。即ち現在の温泉プールの充実もその1つで更に図書館を設け、健全娯楽の施設をなし映画劇場等を設け動物園遊園地をつくり更に四季に対して最適の経営と運営を考ふべきである。此の温泉郷湯口は箆入峡谷なる変化に富む自然性を持つということが唯一の性格である。この性格が行楽の対象として充分である。それが為に道路と、橋梁と、展望休憩所等を人為的に配置し、この地の完全利用に叡知性を傾注すべきである。

## 7 豊沢川の堰堤

豊沢川箆入峡谷地域即ち豊沢川中流地域の西端は白鷺峡谷で、この河川中最大の深潭溪谷である即ち白鷺峡として広く紹介する価値がある。この地点に堤高49米、堤頂140米の堰堤を約10億円の予算で構築進行中である。この堰堤竣工の際には豊沢川上流地域に於ける標高297米以下の地域は全部水没し、満水時の水面面積は12.4方軒である。即ち第1図に示す通りになる。豊沢川上流地域には現在豊沢・桂沢・幕館の三部落があり、総戸数54戸、総人口353人が居住している。

このうち46戸が、水没の為に移住を余儀なくされたのである。伝記によれば、300余年前、秋田方面より移住し、それ以来五人組という組織によつて隣保相提携して1つの犯罪も、不祥事もなく、今日まで共同生活を営み、理想郷、平和郷を持続して来たのである。しかるに国土総合開発の為に永年住みなれた故郷を捨て、いづれも新しい希望をもつて移住を開始している。その心情に対してたゞ敬虔な祈りを捧げるばかりである。かくして造られた湖水は必ずや多くの効果を国民に与へ国富の増加に貢献するであらうことは当然である。まづ下流地域沖積扇に於いて、4,700町歩の水面に対して灌漑し年々27,000余石の米の増加収穫を見ることになつている。落差を利用しての発電事業は動力源として農村を電化し、交通機関を整備し、文化施設を充実して広く国民に便益を与へ、教養の向上に貢献すること必然である、のみならず中流の温泉郷と關聯して観光地たらしむことは地形上、距離上容易なることである。白鷺峡の觀賞、養魚場としての湖水、高原地を映す湖水、遊覧船による清遊、1日のハイキングコースとしては最適の場所である。以上の構想実現に対して第1に着手すべきことは東北本線との連絡であり、交通路の改装であり、交通機関の近代化である。かかる事業の完成なき限り、箆入峡谷の温泉郷も、白鷺の美溪も、豊沢の湖水も、眠れる資源である。

## 8 豊沢川流域の地誌学的区分

前述のように豊沢川地域を地形上、人口上、土地分類上、土地経営上の観点より考察を進めて来たのであるが、総合して見ると、上流地域、中流地域、下流地域の3つに区分することの妥当性を認めるものである。従つてこれ等3地域の地的性格を發揮せしめ、より偉大な成果をあげ得る営力は最早や自然に準備せられたものにあるのではなくて、之を経営し、利用し、貢献せしめんとする地域人の意中に存在するのである。そこで地域人は鋭い時代の洞察力をもつて具体的実在性を巧み

に活用すべきである。

## 9 結 語

豊沢川流域を地誌学的に考察して3つの地域に区分したのであるが、その地的性格を十分に發揮し得るのは政治力である。しかるにこの流域は3つの行政区に分割されている。即ち全面積の75%が湯口村で、21%が太田村である。この両村は豊沢川をはさんで北は湯口村、南は太田村である。しかるに北上川に臨む地域は花巻町に所属する。この地域は豊沢川流域の全面積に対しては4%であるが、花巻町制施行地域からみれば全面積の37%に当り人口総数に対しては31%が所属することになる。従つて最善の経営もその地域の政治性によつて円滑を期し難い場合もある。そこで地誌学的立場よりすれば一定地域の範囲を単元とする必要がある。しからば豊沢川流域は政治上1単元として立地することが理想的地域であるかということになると、こゝに肯定しがたいものがある。それは成程生活資源に於いては自給自足型態を有しているし、土地経営も住民の協同性によつてその実力を發揮している。尙且保健施設に於いても休養地域を有することに於いて優越的環境にある。然し一度視野を広くし社会生活の共同性を考え現在の運営の根源に思いを致すならば最も大きな欠除性のあることに気がつくのである。それは最も大切な呑吐口を持たない。即ち口を持たないということである。若し人間に於いて口を持たないとしたら栄養はとれないことになる。その結果は全身衰弱すること必然である。地域もこれと同様な結果になる。そこで先づ第1に口となるべき地域を設定し口の役割を果させ、しかる後に経営に当るべきである。例え地域的単元として充実し自給自足が可能であつても、それは視野の狭い偏見であり、将来性に於いての發展は困難である。すべて地域の發展性は最も便利な、最も求心的な位置に呑吐地を持つことである。この口を中心として動脈が派生し之を主幹として受け入れた物心を咀嚼し、製品化しては静脈の働きによつて搬出するという交互作用の円滑性が肝要である。即ち一定地域が生態的な形態をとらざる限り伸張性を是認することが出来ないのである。従つて豊沢川流域の生々發展もまづ至便な呑吐口を設定し、全地域人の和によつてのみ達成されるものである。

本調査は湯口村開發策定に關する實態調査の一環として實施したもので、村長齋藤光市氏、助役久保田傳五郎氏、經濟課長久保田傳太郎氏の好意と豫算措置によつたものである。尙實態調査に當つては鈴温泉主藤井三右工門氏、大澤温泉の菊水館主菊池哲雄氏、山水館主、千葉喜和氏、志戸平温泉主久保田大八郎氏より素材の提供を受け、且學生相澤弘、梅野克雄、大和昭男、藤田利彦、奥田惠子、名須川溢男、宮手毅、梅野榮子の諸氏の勞作によつたものである。以上御協力下さつた各位に紙上より厚く感謝の意を表するものである。

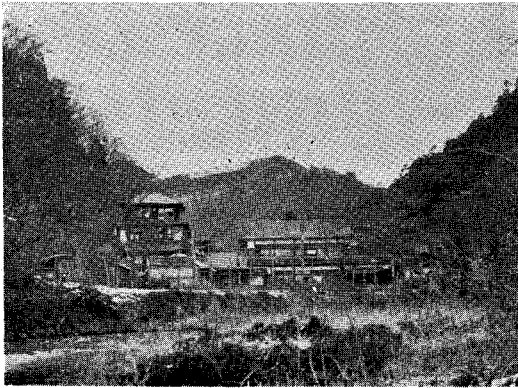
## S u m m a r y

The Toyosawa River, flowing eastward, skirts the southern extremity of Hanamaki, a town in the southern part of Hienuki-gun, Iwateken. It is of but a length of 36 km. and covers an area of only 186 sq. km. -really not much of a river-yet it can boast of its

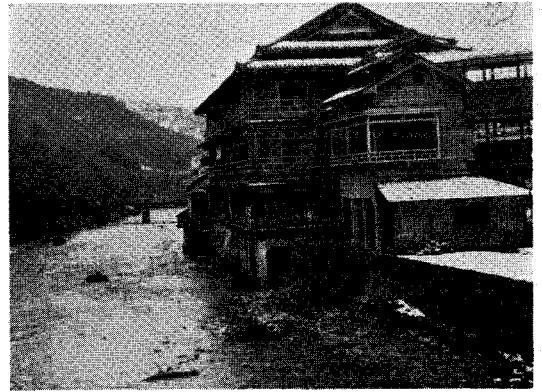
- (1) eminent alluvial fan-shaped tilling soil,
- (2) hotspring resorts nestling between the sharply rising incised canyons, and
- (3) hills well-covered with forests.

The Land suited for tilling rises to a height of less than 200m. while 97% of the hills are over 500 m. and 89% of the hotsprings are to be found at a level between 300 and 700 m. As to the population the distribution is as follows: 87%, alluvial fan





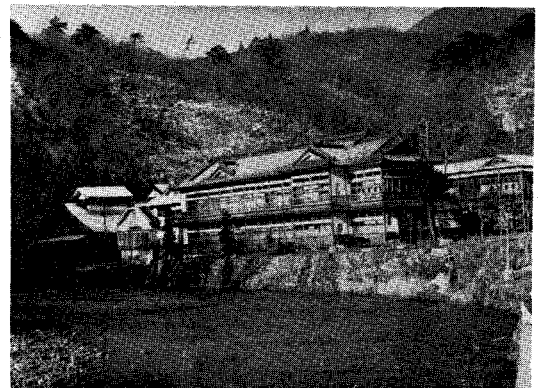
第 1 圖



第 2 圖



第 3 圖



第 4 圖

圖 版 説 明

- 第 1 圖 西鈴温泉旅館全景，前面は豊沢川
- 第 2 圖 大澤温泉旅館の一部 豊沢川の左岸景
- 第 3 圖 大澤温泉旅館の一部，豊沢川の左岸で湧泉地の 1 浴場景
- 第 4 圖 志戸平温泉旅館，豊沢川の左岸に當る

districts, 11%, hot spring resorts, 2%, higher levels and the density is 255, 28, 6 persons per 1 sq. km. respectively.

Of the 14% tillable soil, the level areas cover 12.5% of it which proves its superiority. The woods cover 81% and of this 60.4% is plateau land so herein too, lies its superiority. The canyons in between are not much from the viewpoint of land utilization, but it is not without reclamation possibilities-its en forte being its hot springs.

Taking its geographical formation, population, tilling propensities, etc. into consideration, the Toyosawa River may be divided into 3 parts, Upper, Mid and Lower Streams. As to the future of the three divisions, at the moment a dam is in the course of construction at the river junction where the Uguisu and Shira-Sawas meet. The completion of this installation holds bright promises, as the reservoir with a scheduled surface of 124 hectares may be used for electricity, irrigation and even to draw sightseers. It would then be pertinent that the hot spring resorts of Nishinamari, Namari, Ohsawa and Shidodaira rationalize their business to cope with the situation, resighting advantages. The utilization limits of the Lower regions have been reached. Soil rejuvenation should be considered.

It may be said, therefore, that any future prosperity of this Toyosawa District lies in its foresight, in attracting travellers, that is, in its ability to improve transportation facilities.